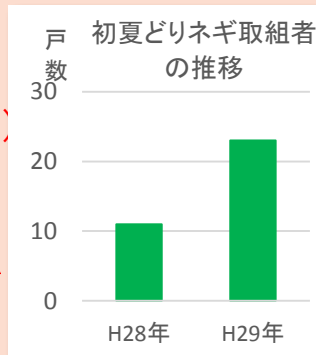


- 山武地域は、全国屈指のネギ産地だが、高齢化と後継者不足により、年々生産量が減少している。**産地間競争力維持が課題**
- 農業事務所は、九十九里沿岸地域の近隣ネギ産地と連携して「ネギ連絡協議会」を組織し、**「初夏どりネギ」の導入を提案し、「プレミアムネギ」と称し、ブランド化**
- その結果、1年目に取組んだ生産者の中には、**単収が従来の1.8倍150万円/10aとなり、取り組む生産者が2年で30戸以上増加**

具体的な成果

1 初夏どりネギ生産者増加

- ①単収(10aあたりの増加(販売額))
84万円(秋冬どり)
→150万円(初夏どり)
- ②夏ネギ作付面積
平成25年 11ha
→平成28年 15.1ha
- ③新規初夏どりネギ生産者数 33戸

2 初夏どりネギのブランド戦略の実施
・統一ステッカー、スイングポップ作成

- ・JA合同販売会議を開催し、「プレミアムネギ」を市場にアピール

3 経営面積拡大に向けた栽培技術及び栽培環境改善

- ・ネギ栽培マニュアルの作成
- ・機械化推進
- ・作業場改善



普及指導員の活動

平成26年

- ネギ産地振興のため、県域活動の一環として、九十九里地域のネギ産地を抱える、JA山武郡市、JAちばみどり、JA長生の3農協が「九十九里ねぎ連絡協議会」を組織
- 作業環境調査

平成27年

- 初夏どりネギを「プレミアムネギ」として「九十九里ねぎ連絡協議会」が産地を越えた統一ブランド戦略の推進
- JA山武郡市の生産者を対象に初夏ネギ栽培講習会開催
- 初夏どりネギ栽培ほ場をJAと定期巡回



平成28年

- 機械導入推進 機械実演会
- ネギ栽培マニュアルの作成

普及指導員だからできたこと

- ・農業事務所が管轄を超えて、3農協と全農千葉県本部による「九十九里ネギ連絡協議会」を組織化
- ・オブザーバーとして県、県関連機関を「九十九里ねぎ連絡協議会」活動支援体制を強化

山武地域におけるネギ産地の新たな取組

活動期間：平成26年度～（継続中）

1. 取組の背景

山武地域は秋冬・春どりの作型を中心としたネギの産地である。しかし、他地域同様、高齢化と後継者不足が深刻化しており、産地の維持には若手・中堅農家の規模拡大が不可欠となっている。そこで作期拡大を目指し、初夏どりネギ導入による規模拡大を図った。

(1) 産地の課題

ア 担い手の減少

現在、山武郡市農業協同組合園芸部葱部会に所属するネギ生産者は433名であるが、高齢化と後継者不足のため生産者数は今後更に減少することが予測されている。（図1）

イ 栽培面積の減少

当地域では生産者のネギ専作化が進み、定植機、収穫機等の導入も徐々に広がり、JA山武郡市が取り扱うネギの栽培面積は

196haとなっている。そのうち秋冬・春どりは182haとなっており、ここ3年ほど変化はないが、徐々にではあるが減少傾向となっている。（図1）

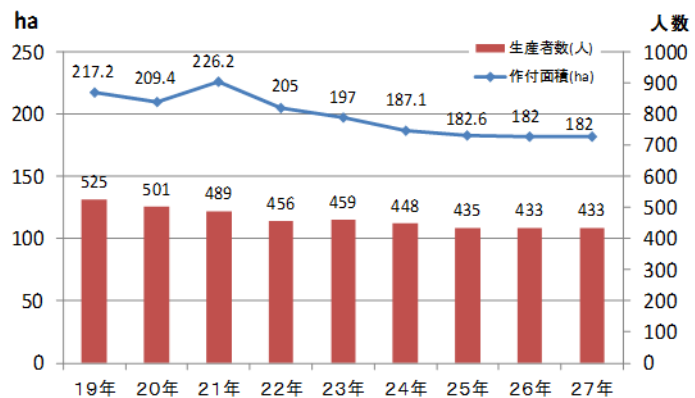


図1 JA山武郡市の秋冬・春どりネギの作付面積と生産者数の推移

(2) 作期拡大による生産量の維持

多くの生産者が生産過程で最も時間がかかる出荷調整作業に、根切り・葉切り・皮むき機を導入しており、作業時間が短縮している。今後さらにネギ経営体を強化するには、生産技術面だけでなく、販売先の維持・確保と市場占有率を年間で維持する必要がある。そこで、現在の主作型である秋冬・春どりの面積拡大だけではなく、産地の出荷量が少ない5月に向け、「初夏どり栽培」の拡大を目指した。

2. 活動内容

(1) 管内関係機関との初夏どりネギ振興に向けた連携活動

「九十九里ねぎ連絡協議会」のJA山武郡市、JAちばみどり、JA長生の3農協では、夏どりの中でも価格が高値安定している出荷端境期にあたる5月の



写真1 初夏どりねぎ巡回指導

初夏どりネギの振興を「プレミアムネギ」と位置づけ、進めていくことを決定し、千葉県園芸協会から、初夏ネギ新規取組者への支援金と共通シールやスイングポップといった販売グッズ作成支援と、全農千葉県本部から販売促進活動の支援を得た。

当管内でも J A 山武郡市とともに初夏どりネギの促進を図り、新規取組者への支援金が、他の作型よりも経費がかかる初夏どりの新規取組者獲得を促進した。

(2) 技術指導連携

山武地域では、J A 山武郡市と初夏どりネギ取組農家のほ場を月 1 回巡回（写真 1 参照）し、生産者への技術指導とともに関係機関の栽培技術指導力の向上の場とした。

また、「九十九里ねぎ連絡協議会」の活動がメンバー相互の初夏どりネギ栽培技術向上に役立った。

3. 具体的な成果（詳細）

平成 28 年産では、関係機関とともに若手・中堅生産者を中心に栽培を推進した結果、新規初夏どりネギ取組者は増加し、栽培面積も増加した。（図 2）。

売上は最も高い生産者で高値相場も手伝い、10a 当たり約 150 万円となった。

平成 29 年産に対する取組では、農協の連携体制も強化され、ネギ生産者が集う行事では、繰り返し取組者の募集を行った。さらに、山武郡市全域を対象に「夏ネギ栽培講習会」を山武市と J A 山武郡市の共催で開催し、加えて J A 山武郡市出荷場単位での講習会も実施した。（写真 3）その結果、平成 28 年度産の出荷実績も影響し、新規取組者は 22 名となった。

一方、生産者への技術対応力強化のため、J A 山武郡市の指導担当の若手職員を対象に栽培講習会を実施し、初夏どりネギ生産者への指導体制強化を図った。

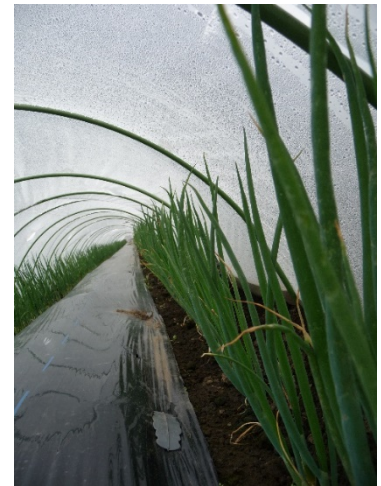


写真 2 初夏どりネギトンネル内

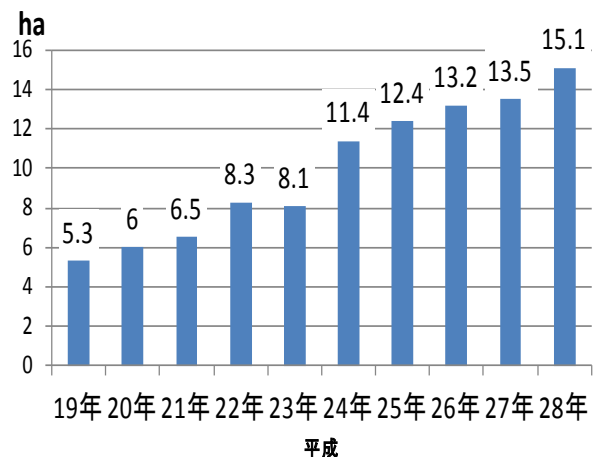


図 2 J A 山武郡市の夏ネギ栽培実績



写真 3 夏ネギ栽培講習会の様子

4. 農家等からの評価・コメント（新規就農H氏）

平成28年に初めて初夏どりネギを栽培した。新規就農のため、資材購入に回す資金が厳しいため、支援金が取り組むきっかけになった。トンネルの設置、管理は初めてだったが技術指導を受けて高単価の5月上旬から出荷することができた。単価が高く8aの栽培で140万円の売上があり、秋冬と露地夏ネギだけだった前年に比べて売上・利益ともに大幅に伸ばせた。さらに早期出荷ができるよう、技術を習得していきたい。

5. 普及指導員のコメント（山武農業事務所 主任上席普及指導員 黒田 篤）

今回の成果は、九十九里ねぎ連絡協議会の海匠・長生農業事務所とJA山武郡市・ちばみどり・長生、全農千葉県本部の連携協力なしにはあり得なかった。協議会の活動により各メンバーが相互に理解を深め、同じ目標に向かって活動する下地ができたことが成果を得られたポイントだったと考える。

6. 現状・今後の展開等

(1) 初夏どりネギの生産者拡大方策

初夏どりネギの育苗は、チェーンポット苗やセル苗等による稚苗育苗法が一般的である。JA山武郡市管内では大苗育苗を行っている生産者も多いため、初夏どりネギの導入に関心があっても、育苗方法を変えることに不安を感じ、導入に至っていない生産者も多い。また、水稻との複合経営が多く、繁忙期が重なるため、労力的な問題で取り組めない生産者も多い。

このため、播種、育苗から定植までの作業委託の体系が構築できれば、上記のような生産者も初夏どりネギに取り組みやすくなり、また、既に取り組んでいる生産者はさらに規模拡大が可能となるため、今後、関係機関と連携しながら課題解決に取り組んでいきたい。

(2) 若手生産者の集団化

産地と自らの経営について同じ立場の生産者同士が、相互により良い産地を目指して意見交換をすることができる場を生産者に提供し、ネギ産地の維持発展を図っていく必要がある。ネギ産地の将来は若手・中堅の生産者にかかっている。関係機関との協力を密にしながら、次代を担う生産者と共に山武地域の基幹作物であるネギ産地維持発展を図る必要がある。

初夏ネギの導入により、ネギの専作化が進むことで、作業効率が高まり、規模拡大意欲の高い若手生産者が、より面積拡大に取り組みやすくなることが期待される。既に家族経営のみで年間のネギ栽培面積250aを実現している生産者もおり、このような経営体が増えていくことが、ネギ産地である山武の農業全体の活性化と発展に寄与していくと考えられる。